

ウラジオストックの医療

ロシア連邦

ロシアの医療はどんな様子なのであろうか。筆者も、様々な国に視察に行っているが、ロシアの医療については視察の機会に恵まれなかった。ただ極東ロシアについては、以前日本で病院管理職に研修を行ったこともあり、今回、極東のウラジオストックを訪問したので、報告したい。

まず、ロシアであるが、ご存知のように世界一の面積を持つ国であり、人口も世界 9 位、GDP は世界 8 位（2013 年時点）の大国である。広大な国土を持つので、いくつかのエリアに分けて考えたほうが良いと思われる。

9 つの連邦管区の 1 つである極東ロシアには、下記のように東シベリア（ロシア語版）のバイカル湖から太平洋に接する地域までの範囲が含まれる。



極東連邦管区 (赤色の部分)

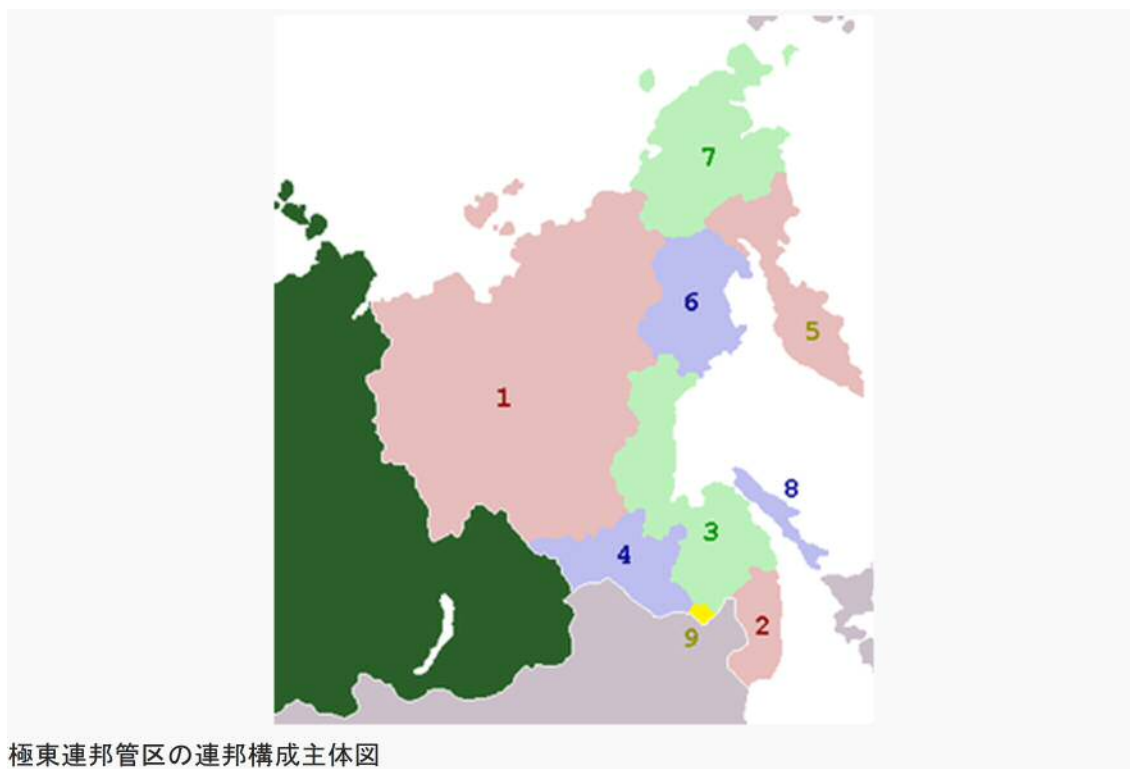
WIKIPEDIA より

極東連邦管区の本部は、今回訪問した沿海州のウラジオストックではなくハバロフスク地方のハバロフスクに置かれる。極東ロシアの人口はソビエト連邦崩壊後急速に減少しており、2016 年の人口は 619 万 4969 人で、2002 年の 669 万 2865 人に比べて減少中、ロシア全体の 4.23% である。一方、極東は 620km² 以上、ロシア全体の面積の 3 分の 1 以上の面積を持つ地域であるので、極東ロシアは世界でも有数の人口密度の低い地域となっている。また、極東ロシアの人口の 75% が都市圏に集中している。

今回の訪問は、沿海地方/プリモルスキー地方にあるウラジオストックになる。ウラジオストックはロシア海軍の太平洋艦隊の基地が置かれる軍港都市であるが、成田から週に 3 便の直行便で成田から 2 時間半でついてしまう。ただしビザが必要であるし、入国審査では入国用紙を職員が書いてくれる（ただし時間がかかる）。(写真)

丘陵上の市街に囲まれるようにして金角湾が半島に切れ込んでおり、天然の良港になっている。街の中心部は金角湾の奥にある。南には東ボスポラス海峡をはさんで軍用地や保養所などのあるルースキー島がある。この島では 2016 年の東宝経済フォーラムが行われ、安倍首相も出席した。ハバロフスクをしのぐ勢いで経済発展しているエリアである。街の

雰囲気は、ヨーロッパ的ではあるが、渋滞も多い状態であった (写真)。



極東連邦管区の連邦構成主体図

WIKIPEDIA より

1. サハ共和国
2. 沿海地方/プリモルスキー地方
3. ハバロフスク地方
4. アムール州
5. カムチャツカ地方
6. マガダン州
7. チュクチ自治管区
8. サハリン州/「北方領土」を含む
9. ユダヤ自治州

極東連邦大学医療センター (写真)

名前の通り極東管区最高の医療センターとして作られた。前述したルースキー島にあり、町からはかなり離れている。220床と病床数は少ないが、電子カルテで、極東で1台という、ダビンチを持ち、平均在院日数は6日、オペ室が9室、デイサージェリーの部屋が30室と西洋的なスタンダードを満たしている。そのほかにリハビリ用のベッドをホテルとして200室用意している。場所が場所だけに、救急医療はしていない。CTは持たずに(街で検査をするので不要とのこと)、CT-PETが1台、3TのMRIを1台所有している。

ロシアでは、20 ベッドを1 単位として、最低看護師を3 名配置するのが基準である。スタッフは600 人、うち医師が200 人、看護師が300 人である。VIP ルームでは4500 ルーブル（1.5 円として6750 円）の部屋代、1 人部屋は3500 ルーブル、2 人部屋では2500 ルーブルという。

保障については、病院で手術は一定数行うまでは国が負担して無料であるが、それ以上の手術に関しては、病院の持ち出しになるという予算制になる。ちなみに、ダビンチの場合には、自費で行った場合には胆嚢手術の入院期間は7 日間3000 ドル（韓国、シンガポールでは10000 ドル）、前立腺がん8 日間入院で5000 ドル（韓国シンガポールでは20000 ドル）と廉価だという。

外国人の患者も来院するが、基本英語の対応になり、各国語の通訳はいない。

自由診療を中心に行うリハビリが特徴的で、放水治療 CO2 風呂、電気風呂、塩の部屋（写真）、泥治療など日本でいえば、スパで行われているものに近いものも多く行われていた。

ポリクリニック（写真）

ポリクリニックといわれる診療科を多く持つ診療所がロシアのプライマリケアを担う。ゲートキーパーの役割を持っており、ここで診察を受けたうえで病院を受診するシステムである。ただ、外来を病院で行った方が、ワンストップでいいのではないのか、という議論もあり、一部の病院（たとえば極東連邦医療センターや州立第VI 病院）では、外来も行うようになっている。

訪問したポリクリニックでは、産科以外のプライマリケアを提供していた。ここでは約5 人の住民（うち約30%が患者）を管轄しており、内視鏡やレントゲン施設も持ち、94 名の医師、3 つの分院を抱えおり、日本的いえば巨大クリニックである。外来は8-20 時、救急も24 時間、リハビリテーションも行う。基準を満たせば往診も行う。カルテは紙だが、予約はネットで可能である。

計画では、1 日820 名の外来患者を診察する予定であったが、実際には1200 人が来院し混雑している。急病は当日の受付、その他複雑な病気であっても、いわゆる waiting time が発生しないように義務付けられている。

なお、薬剤については、医薬分業であり、医療施設での投薬は無料であるが、薬局での購入は、特定の疾患を除いて有料になる。筆者は、ウクライナ製のサロンパスを処方箋なしで購入したが、100 円以下と廉価であったが、質がかなり悪かった（写真）。

北斗画像診断センター（写真）

北斗画像診断センターは、帯広にある社会医療法人「北斗」が平成25 年5 月28 日にウラジオストックで開業した。事業の目的として「脳ドックや心臓ドックを中心とした第二次予防医療の当地での展開」「日本の医療技術の海外移転及び当地での医療技術者の育成」「日本の医療機器の海外普及」を設定している。

場所は、以前に建築関連の職員の保養所であった場所の 1 部を借りており、内科、神経内科、眼科、循環器、整形外科、放射線科といったラインナップになっている。放射線科は、画像診断センターの名の通り、難しい診断は遠隔医療で日本からのアドバイスを受ける体制になっている。人間ドックと画像センターが主であり、日本製の 64 列 CT、1.5T の MRI、高機能のエコー（写真）を備えている。ハードのみならず、ソフト面でも 24 時間ホルター心電図の解析を日本で行ったり、画像編集ソフトが日本製であったり、電子カルテも導入し、ハード、ソフト面ともに日本の英知を集めて作られている。

なお、ロシア人は医療データを自らが管理するというので、画像などのデータは袋に入れて患者に返すシステムになっている（写真）。

ちなみに、1993 年のソビエト連邦崩壊に伴い、医療保険制度がつくられた。これは日本同様に強制保険であり、この導入に伴い、2011 年以降は全国共通の保険証で、民間病院の一部にも、この保険証での受診が可能となった（北斗病院もその方向）。

なお、日本のみならず外国資本や民間立の医療機関が増えてきており、医療特区設立の動きがあったり、オランダ資本の医療機関（ファルク・メディカルセンター、15 床）もできている。

最後に

ロシア特に極東の医療はまだ遅れている。日本に医療を求めに来る医療ツーリズムも盛んであるが、今回の視察でその理由がわかったように思う。

日ソでは平和条約もいまだ締結されていないが、極東とは距離が近いので、北斗病院のように、医療を含めた経済などの虚位力の進展を望んで、この項を終わりとしたい。